

## 植島啓司『聖地の想像力』

( ) 内の数字は、本書の頁数。

上原 雅文

東亜大学 人間科学部 人間社会学科

e-mai:ueharama@toua-u.ac.jp

人間は、曖昧で日常生活を脅かすような不思議なモノや場所を避けるようにして生きている。不思議なモノや場所は日常生活から排除するか、あるいは科学による解明で安心を得ようとする。科学や文明の発達はこの世界から“不思議”を減少させ、人間を幸福に導いているようにみえる。

しかし、本当にそうだろうか。一方で、人間は不思議を求めているのではないだろうか。少し古いが、1980年の西武百貨店のキャッチコピーは糸井重里氏による「不思議、大好き。」だった。人間には「不思議」それ自体を求める志向があることを見据えたコピーである。また、都市の中に不思議スポットをつくりだす都市伝説は絶えず再生産されている。つまり人々は新しく不思議な場所をつくり出そうともしているのだ。

少し前から“聖地ブーム”といわれている。2004年にユネスコの世界遺産として「紀伊山地の霊場と参詣道」(熊野古道、大峯奥駈道など)が登録された頃からだったと記憶する。最近、聖地は「パワースポット」という名称に変わり、そこへと旅することが新たなブームになっている。聖地こそ、古くからの不思議スポットである。人々はそこに何を求めているのだろうか。癒し?自分自身を見つめる場所?スピリチュアルな感覚を求めて?

聖地という不思議な場所で何かを実感したい、そういう「心」の働きが人間にはある。本書が目指しているのは、副題にもなっている「なぜ人は聖地をめざすのか」という問いの解明である。それは、不思議を求める人間の「心」の深層を解明することに通じるだろう。

筆者は東京大学大学院修了後、シカゴ大学大学院に留学し、著名な宗教学者であるM・エリアーデらのもとで研究。1980年から関西大学で教員を

つとめつつ(2002年辞職)、現在まで世界各地で調査を続けている。本書が書かれた2000年、「ここ数年で四七ぐらいの(世界各地の)聖地を訪れてみた」と書いている。

本書の魅力は、短編ながら、豊富な実地調査に基づいた、世界各地の聖地の写真入りの紹介と見聞記、そしてそれらにある共通性の仮説提示である。各地の聖地に共通の特徴を見出し、人間にとっての意味(心の深層)を解明しようとしているのである。日本の古い神社や寺院、キリスト教やイスラム教の聖地、あるいは世界の先住民の諸聖地などが共通項を持っているという事実自体、興味深い。遠く離れた所でわれわれには縁遠い宗教を信じている人々と、人類としての共通の根っこを共有している気になるからである。

さて、本書で提示されている聖地の定義を紹介しよう。

- 01 聖地はわずか一センチたりとも場所を移動しない。
- 02 聖地はきわめてシンプルな石組みをメルクマールとする。
- 03 聖地は「この世に存在しない場所」である。
- 04 聖地は光の記憶をたどる場所である。
- 05 聖地は「もうひとつのネットワーク」を形成する。
- 06 聖地には世界軸axis mundiが貫通しており、一種のメモリーバンク(記憶装置)として機能する。
- 07 聖地は母胎回帰願望と結びつく。
- 08 聖地とは夢見の場所である。
- 09 聖地では感覚の再編成が行われる。

すべてにわたって紹介したいところであるが、枚数にも制限があるため、一部分の紹介に止めておく。

まず定義01の「聖地はわずか一センチたりとも場所を移動しない」から。筆者によれば、エルサレムは、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の三つの宗教の聖地として有名だが、それ以前から100以上の宗教の聖地だった痕跡がある。イスラム教最大の聖地であるメッカにしても、イスラム教以前からの複数の宗教の聖地として機能していたという。それだけではない。筆者は本書の随所で古くからの聖地に新しい宗教の聖地が重なっている例を挙げている。そして「後発の宗教にとって既成の宗教は邪教だから、別の場所に祭壇をつくればいいものを、なぜか同じ場所にばかり祭壇をつくりたがる」（16頁）と皮肉まじりに説明する。

つまり筆者によれば、聖地においては、祭られる神そのものより「神と特定の場所との結びつき」の方が重要である。聖地には、「場所そのものに特別な力がある」（28頁）という。

その「力」の正体をめぐっての定義が、02「聖地はきわめてシンプルな石組みをメルクマールとする」である。筆者は数多くの調査をもとに、聖地が場所を移動しないのは、「そこに石（石組）があったからだ」という仮説を立てる。根拠として、エルサレムのゴルゴダの丘（イエスの刑死の場所）は石切場だったことや、同じくエルサレムにあるユダヤ教とキリスト教とイスラム教の聖地である「岩のドーム」の内部は巨大な一枚岩であり、石切の跡が見られること（34～36頁）、などの例を挙げる。

筆者は岩山がキリスト教の聖地となっている例も挙げる。フランスのル・ピュイにあるサン・ミシェル・デギュイユ礼拝堂は巨大な石の塊の上に立っている。ル・ピュイには他にも同様の岩山や丘の上に礼拝堂や聖堂があるが、そこはいずれもキリスト教以前の聖地であり、いずれにおいても岩が神聖視されているという（41～43頁）。

また筆者は、石自体が「力」を持つ例も挙げる。メッカにあるカーバ神殿は、イスラム教徒が毎日5回の礼拝を行う方向であるとともに、一生に一度は巡礼すべきとされている聖地である（毎年巡礼の時期には200万を超えるイスラム教徒が集まる）が、その神殿で最も神聖視されているのは、一個の「黒曜石」であるという（36頁）。

なぜ石や岩なのか？ 筆者は、隕石との関係を述べている。隕石は地磁気を微妙に狂わせて地質学的な異界をつくり出すという理由からである（44頁）。しかし、信仰されている石がすべて隕石や磁気の異常をもっているわけではないだろう。それより、筆者が引用している文化史の横山俊夫氏の「石は万物の根元」（47頁）、「石を拝むとか……、おそらく古くからの人間の精神の仕組みと関わりがある」（48頁）という言葉の方が示唆にと富む。特定の石や岩に「万物の根元」をイメージするのは「人間の精神」（心）の働きであろう。

聖地での心の変化について、定義03「この世に存在しない場所」をめぐって、筆者は次のようにいう。「そこへ行くとわれわれの通常感覚や記憶などが」変わり、「そこに立つだけでやすらかな気持ちになったり、……普段は感じ取れない気配を感じ取ったりすることができる」（55頁）、と。具体的には、やはりここでも筆者は石組みのある場所に注目し、J・スワンの「ストーンヘンジその他のヨーロッパにある新石器および青銅器時代のストーンヘンサークルに見られる石の配列……、牧草地の中に巨大な一枚岩がある光景は、それ自体、人間精神の奥深いところを揺り動かす」（57頁）という言葉を用いている。

同様な場所は日本にも数多く存在している。筆者が挙げている奈良県にある春日大社は、創建以前の古地図では、その場所に建造物はなく、単に「神地」としか記されていない。その場所には、多くの「磐座（神の依り代となる岩石）」や祭祀遺跡があったことが報告されている。おそらく春日山を神体山としてそれを遙拝する場所だったのでと筆者は推測し、そこに神社の原初形態をみている。原初形態を残している神社として、筆者は奈良県の大神神社を挙げている。大神神社の神体山は三輪山であり、私もその山に調査に行った時、その山の麓の磐座、山中の数多くの磐座群、そして頂上の磐座群などの神秘的な景観に、確かに「精神の奥深いところを揺り動か」された覚えがある。

聖地を求める人間の心の働きは、宗派の区別を超えた普遍的な働きではないだろうか。それを筆者は、聖地は「宗教以前の深層に起源がある」（120頁）と表現する。また聖地巡礼に関して、

「巡礼とは…単なる場所の移動ではない。それは同時に人間の生の始まりに向かう運動なのである」(121頁)と、そこに「生の始まりに向かう」心の働きを見ている。

聖地が「人間の生の始まり」に関係しているとはどういうことだろうか。それは、宗教学者のM・エリアーデによる「世界軸axis mundi」という言葉と結びつけて説明される。定義06には「聖地には世界軸axis mundi が貫通している」という一文がある。「世界軸」とは、もちろん象徴的にはあるが、「生成の根拠となり、人々が住む世界の起源となっていく」(129頁)という意味で、あるいは「三つの宇宙領域(天・地・冥界)の中心ちゅうを貫いている」(133頁)という意味での「世界の中心」であるという。聖地とは、いわば「生の始まり」と「生の終わり(冥界)」との両方を実感させる場所であるといえよう。例として挙げられる「岩のドーム」は、「生の始まり」に関しては、「世界のへそ」「宇宙の卵」などと呼ばれているという。また「生の終わり」に関していえば、ドーム内の一枚岩はイスラム教の開祖であるムハンマドが昇天したという伝説を持つ場所なのである(133頁)。

さて、以上までの紹介をもとにして、本書が提示する聖地の意味を私なりにまとめてみよう。

聖地には石や岩があり、そこに人々は「宗教以前の深層」である“万物の根元、生成の根拠”(生の始まり)を、あるいは“死”(生の終わり)を、心の内に感じ取ったのではないか。それが場所の「力」となり、宗教の違いを超えて、古くから人々を引きつけているのではないか。であるならば、聖地に巡礼することは、自己自身の根元・起源やいずれ訪れるであろう死と向き合うことであり、日常的な感覚を超えて、宇宙と自己自身とのつながりを実感し思索することなのである。その意味で、聖地巡礼は哲学に近い営みであるといえよう。その営みが、世界各国で宗教の違いを超えて共通に見られるという事実の意義は大きい。聖

地研究が宗教対立の解消や異文化理解に寄与するのではないかという期待を抱かせるからである。

最後に本書に対する不満を少しだけ挙げておきたい。それは、水に関わる聖地が挙げられていないという点である。井戸、泉、滝、これらは日本各地の多くの聖地にみられる要因である。私が調査した日本の聖地の多くは、石や岩が磐座としてあり、その周囲に水に関係する場所があり、神体山や島が遙拝できる、という条件を持っていた(余談だが、私から見れば、ここ下関の住吉神社いのみやと忌宮神社も典型的かつ複合的な聖地である)。砂漠地帯のエルサレムやメッカを典型とした場合、水は無縁とならざるを得ない。しかし水に関わる聖地を視野に入れるならば、地形や気候風土による聖地形成の違いに光を当てつつ、より根源的な共通項を探る研究が必要となってくるだろう。

本書を読むと、ある聖地に行ってみたくなくなり、詳しく調べたくなくなったりするに違いない。本書を片手に、身近な聖地である住吉神社に行くのも一興である。本書を通じて、何らかの行動への意欲がかき立てられたなら、それは新たな学問探究の入り口に立っていることになるのである。

集英社新書(2000年6月), 196頁, 680円

